

五才児におけるある劇あそびの実践と反省

村 石 京 子

幼稚園の第二学期も末のある日、園全体の集まりをもち、各組代わりあって、うたや劇あそびなどをやり、そして、それを見て楽しむという会をもった。

1、集団生活の力と劇活動

わたくしが担任している組は、五才児の中でも誕生日が早い方の子どもで組で、幼稚園では最年長児である。そのため幼稚園では、何かのおりにはよく「大きい組だから」ということばを使い、子どもたち自身に幼稚園という集団生活の場面では、自分たちが一番年長児であるという自覚をもって行動するようにと望むことが多くあった。そのために、たまたま子どもたち同志でトラブルを起した時など、ある子どもが「大きい組なのにけんかなどしておかしいじゃないか」と仲裁役を買って出ると、わたくし子どもがそのトラブルに

立ちあつて処置しなくとも、そのけんかは自然と解消することが多くみられた。また、お話し会だとか、うたの会などを組の中でする折に、恥ずかしくてグループの隅にかくれている子どもがいたり、その子に「いちばん大きい組になってもまだできなかったら、小さい組の人みたい」などと言いだすおせっかいやさんがいる。これに対して言われた子どもは、非常に年長組であるという誇りをききずつけられて奮起する。年長組だからという一人ひとりの誇りが、グループ全体の大きな力となって、そのあいことばがひっこみ思案の子どもにたいする治療法となっている場合がある。

つまり、子どもは常におとなをえらい者だと信じ、また子どもであるがための抑圧をしばしば受けているので、少しでも早くおとなに近くなりたい、大きくなりたいという願いを隠れようもなく生活のすみずみにもっているのである。それなのに同年齢の仲間から自

分を年下のものであるかのように見られるということは、非常に屈じょくを感じ、それに反撥して、グループの成員としての資格をグループから与えられるように、必要な役割をはたそうと努力するのである。

五才児にくらべて、三才児・四才児のころには、右に感じたような、子どもたちが互いに協調して、認めあい、はげましあって、集団の力をもりあげ、つくりあげていくようすは少なかったように思う。これは五才児になってから特に多くみられるようになってきた傾向であり、子どもの大きな集団生活への発達である。そしてこの力が、この際には劇遊びが立派にできるかどうかのきめ手になると考えられた。

つまり劇遊びとは、ただその役にあたった子どもが自分だけ上手にせりふを言ったり、行動することができたとしても、教育的な価値は少ないのである。劇遊びは、役にあたった子どもが互いに認めあい、助けあって行動する。また、見ている子どもたちが、劇がうまくいくように心の応援をしていく。このがっちりとりくんだ劇遊びこそ、教育的価値のあるものである。また、子どもにこの集団生活の力を、からだで感じとらせる一つの手段となるものではない。

2、劇はむずかしいけれど

さて、この子ども会の折に何をしたらよいだろうという相談を子どもたちにしたとき、皆の案は圧倒的に劇をしようということであった。ところが、いざいろいろと話し合ってみると、口では劇がいいとなえ、大きい組だから難しい長いのにしようよなどがんばる子があるかと思えば、そういう提案をする者のいるかげに、劇と聞いただけでたいへんだと思い、胸をどきどきさせている者もあった。しかし皆の表情をじっと見てみると、ともかく、みんなで力を合わせてやろうという集団行動への興味と熱意がよく感じられた。わたくしは、この「皆で力を合わせていっしょに」という子どもたちの意気込みを何よりも尊く感じたのである。

3、劇の選定に注意したこと

これから、幼稚園をおえて、小学校、中学、高校と次第に学校を進んでいく間に、学芸会、記念祭などの機会はたくさんあるにちがいない。それも、きつと練習に練習をつみ、配役も適役を選出し、いわゆる見せるための劇をおこなう機会はいくらかもあるだろうと考えた。幼稚園の劇は、まだ劇あそびという過程であり、劇というものへ入る前段階である。見せるための劇でなくてもよい。見るもの、やるものが楽しんでひとつの雰囲気にとけこむ、そして何かをカッチとうけとめられるものが望ましい。見る楽しさだけを感じとっていい。する楽しさだけを感じとっていい。皆でこういう劇

をしたのだという喜びだけを得られれば、もうすでに劇あそびの大きな使命はたざれたと見てよいのである。

それには、組の中の特定の子どもに役をつけずに、皆が同じような重さの役割でやれるものが多い。そしてせりふは子どもたち同志でつくらせよう。せりふがどの子どもでも、苦にならずに話せるぐらいの長さのものであること。それから筋はあまり烈しく展開しないもの、内容は動物などを登場させて、おもしろくやさしく理解できるもの、動きのあまりむずかしくないものという点に注意した。そしてつぎのような劇を選んだ。

4. 「さるのさかなつり」という劇

(1) 題 「さるのさかなつり」(落合聡三郎氏作より)

(2) 筋 さるがつりざおをかついで浜辺にくる。そしてつり糸をたれる。そこへたいが一匹泳いできて、これを見つけてえさにかかるとさるは喜んで引っぱり上げようとするが、たいも負けまいとがんばり海の中へさるを引っぱり込もうとするので、とうとうさるは、丘の動物に応援を求める。たいも魚の仲間をよんで応援を求める。動物と魚はつぎつぎと出て来て、つり竿を引きあい、動物たちは魚を陸の方へ引っぱり上げ、魚たちは反対に動物を海の中へ引き入れようとして引っぱりあう。そしてとうとうつり竿の糸が切れて、魚も動物も皆しりもちをついてびっくりする。そこでもう、今までのよ

うな引っぱりあいはやめて、浜辺で皆で仲よくあそぶ。

(3) せりふ (一通りの筋を子どもたちに話したのち、せりふは子どもたち同志で考えて作った。)

さる 「ああ、今日はいいいお天気だなあ。きっとおさかなもいっぱい釣れるだろう。」

たい 「あ、こんなところにえさがある。」

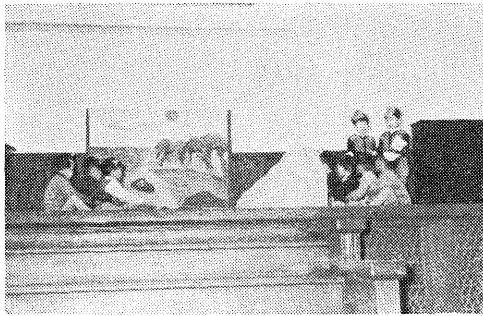
さる 「しめた、おさかながかかったぞ。よいしょ、

よいしょ。大きいだいなあ。よいしょ、よいしょ。」

たい 「負けるものか。よいしょ、よいしょ。」

さる 「これはなかなかたいへんだ。ようし、誰かに応援を頼もう。」

おうい。誰かきてくれ。」



動物 「どうしたの?」

さる 「このたいがあんまり引っぱるもので、海の中へ引っぱり込まれそうなのだよ。きみも手伝ってくれ。」

動物1、「ようし、僕も手伝ってあげよう。」

以下動物2、3、4……と次第に登場するが、動物同志の会話は皆右のものと同じ。

たい「たいへんだ。僕もおさかなたちに応援をたのもう。おうい。

誰かきてくれ。」

魚1、「どうしたの？」

たい「お山の動物たちが引っぱるから、君たちも手伝ってくれよ。」

魚1、「ようし、そんなら僕たちも手伝ってあげよう。」

以下魚同志の会話は同じ。

(4) 出てくるものの種類(役割は自分たちで好きなものを選んだ。)

動物Ⅱさる・ぞう・たぬき・うさぎ・ねこ・くま・いぬ・きりん

魚Ⅱたい・たこ・いか・かに・かつお・かれい・えんぜるふいっし

ゆ・くじら

そのほか動物では、かば・さい・らいおん・やぎ、魚では、さめ・まぐろなどの名前があげられたが、お面の製作がどうもうまくいかないなどの理由によって、結局右のような種類が選ばれた。

5、結果と反省

わたくしは、この劇を計画するにあたって、まず第一に、組中のだれもが楽しんで参加できるようにし、また人前で恥ずかしがらずに大きな声で発表をするということを目標において、全員が一言で

も二言でもよいから必ずせりふをいうことにした。そのため、どの子どもも皆同じ力をもつ劇であったので、皆喜んで劇遊びの計画に参加し、それを進めることができた。

しかし、それだけに筋が単調になり、同じ会話のくり返しが多かった。つり竿を引っぱる魚側と動物側の人数が次第にふえていき、最後には全員が登場するというのが劇の進行であったために、見る側には同じことのくり返しばかり多いという印象を与えた。

つまり、この劇は相手の側に引きこまれそうになった者が、仲間ものものに応援をたのむ。登場した者は必ず「どうしたの？」と聞く。これにたいして一同は口を揃えて、その状態を話す。そしてまたこれにこたえて「それなら、わたしも手伝ってあげましょう。」と言う。そしてまた前と同じく魚と動物は互いに、つり竿を引っぱり合うという構成である。この同じことが、一回にだいたい二人ずつの割合で登場し、三十余名全員登場するまでに十回もくり返されたであろうか。この単調さは、わたし自身も数回の練習の時、気がつかないでもなかったが、ただ、級中の全部の子どもにとって、この劇あそびが発表力を養うという点でプラスになってほしいという考えを持っていたためである。

また、舞台に出た子どもにはそこで思いきりのびのびと活動してもらいたいと思い、つり竿の糸があまりの引き合いの結果、とうとう切れてしまったあとは、魚になった子どもと動物になった子ども

は仲よくゆうぎをするというまとめ方をした。する方の子どもは、どこまでも楽しんで元氣一ぱいであったが、やはり子どもたちの活動のみにとられすぎていたために、ゆうぎの回数もくり返しが多かった。広い講堂の段上とはいっても、一組全員が動きまわるにはせまく、ごたごたした印象を見る方に与えた。子どもは扱い方という立場から、あまりにも組の中の子どもの一人ひとりの気持を尊重しすぎて、見る側する側お互いに楽しむ会としては、一方に偏しすぎたことを反省している。

「劇はむずかしいけれど」と書いたが、真実劇はむずかしい。幼稚園の劇あそびは、ふだんの子どもの遊びとかけ離れたものでは困るので、そこに適当に脚色し、筋道をつけておもしろく運ぶことが必要である。そして、この劇あそびをしながら、幼児の言語活動の力を伸ばし、また更に集団の結びつきの力を体得させることが望ましい。

終りに、この劇遊びを計画し、それにとりかかりだしてからのエピソードを一つつけ加えよう。それは先に劇遊びには、集団の協力、はげましい合いなどがつくられてこそ、教育的価値があると述べたが、ある日二〜三人の母親に「今度の子どもの会の時には、この組では何か劇をするそうですけれど、その中味は絶対秘密、見る時まで教えてあげないと子どもたちが、みんなで共謀して教えてくれないのですよ。」と聞かされた。子どもたちが、いつそのような約

束事をしたのか知らないが、劇をするという子どもたちの協力は思いがけない方向へも発展していたのであった。

幼児も、集団生活を二年なり三年なり過す時期になると、この場合わたくしの最初からのぞんでいた劇遊びの中でのはげましい合いには、当然その意図するところをはたした以上に、教師がタッチしなくとも、自分たちの仲間意識を強くもち、自分たち仲間同志できめた約束事には、そのグループの一員であるという誇りにおいて守っていく力をすでに得ていることを知り、非常にうれしく思った。

幼児教育の大切さは、うたを上手にうたえるよう指導したり、劇遊びをおもしろくやったりする以上に、同年齢の子どもによってつくられた集団社会の中で日々を過し、そこで自ら集団の中の一員としての役割をはたしていく力を身につけることにあるのであるが、このような思いがけない協力も、やはり集団の力というものを身につけた上での結果でもあろうかなどと考えられたのである。

* * * * *

* * * * *